

連休の春山遭難

大型連休のさなか北アルプス槍ヶ岳山頂直下で45才の登山者が転落、正午には富士山9合目で突風にあおられた二人が千尺滑落、中央アルプス槍尾岳で五四歳の登山者が突風に煽られ雪の稜線から谷に千尺滑落してハイマツ帯まで白い山から緑の山裾に飛んでしまった。北アルプスの北穂高や奥穂高で滑落、大天井岳付近で、同じころ富士山で、中央アルプスで…、と一九九一年の大型連休の後半の五月三日から五日にかけて雪の斜面や稜線から滑落した登山者が次々と姿を消した。遭難者8名のうち死者行方不明者が三五人にのぼり、とくに中高年の登山者の遭難が多発し家族のもとに悲報が相次いだ。大型連休の遭難としては、発達した低気圧が通過して風雨やミソレ、大雪に見舞われた一九九一年の連休遭難で死者行方不明六五人を出したのが最悪記録で、七二年の三八人があり二〇年ぶり三番目の悪い記録となった。

四月末から五月のはじめにかけては、地上では初夏と春を分ける季節の縞模様が列島を北上中だが、上空では冬の季節と春の季節をわける偏西風ジェット気流がちょうど日本列島のすぐ北側に走っていることが多い。ときには大きく蛇行して低気圧を発達させ春の風を呼び込み背後の寒気を列島に誘い込み、移動性高気圧を引

き連れて五月晴れと八十八夜の別れ霜をもたらすのもこの頃である。

この年の連休も春の風をもたらした低気圧が発達しながら足早やに日本列島を駆け抜けオホツク海にはいつて速度を落した。停滞した低気圧の背後から北西の流れに乗って次々と寒気が誘いこまれるように南下して新緑寒波が襲来した。五月一日には高気圧に覆われて春の風一過、つかの間の五月晴れとなり穏やかな登山日和となった。これが悪魔の微笑みだった。上空の気圧の谷の通過とともにこの季節としては珍しく冬型の気圧配置となり、山々では寒風が吹き荒れた。大量遭難のあった三日から五日にかけての山頂付近の高さ三千尺、七〇〇尺の高層気象の観測データをみると、能登半島の輪島で二日九時と三時では西より一〇尺、気温マイナス八度前後ですすまずだったが、上空の気圧の谷が通過したあとで、急激に悪化して三日九時には西北西二〇―二十五尺となり、二時には三〇尺と強まり四日一杯続いた。三〇〇尺級の山々の山頂や稜線付近では三〇尺を越える突風が吹き荒れ立山や尾瀬では吹雪になっていた。槍尾岳での遭難の記録をみると、三日夜山頂付近の避難小屋周辺でテントを張っていた登山グループが強風と寒さに耐えきれず次々と山小屋に逃げ込んでギューギュー詰りとなつたと報告されている。風速が二倍増すと一度下がる計算をすると、この夜の屋外での体感温度はマイナ

ス二〇℃をはるかに超えていた。遭難当日の四日の天候は視界は良好だったが風が強く、予定の山頂をあきらめて下山し始めた矢先に突風に襲われた。同行メンバーも稜線の風下側に回り込んでピッケルで支えて屈んで強風をやり過して九死に一生をえた。

春の風によつてもたらされた暖気で雪面の表面が解け、再び襲来した寒気で凍ってアイスバーン化し極めて滑りやすくなり、強風が吹き荒れてバランスを失って滑落するなど大量遭難を招いたのである。この年の連休の遭難者のうち死者行方不明者でみると、実に六三%が四〇歳以上であり、まさに中高年の春山連休の大量遭難となった。その傾向は過去20年をみると明らかに年を追ってその比率が高くなっている。

この中高年の春山遭難は以下のような理由によると考えられている。当然青年期に比べて基礎体力が落ちているのに、昔は…と自己過信が残り、自己流の未熟な技術が落とし穴となっている。さらに中高年になつて初めて山登りを始めた人たちの雪山経験不足、それに加えて道路や交通機関が整備されて山の奥まで簡単に入れ、ときにはアツという間に山頂近くまで運んでくれて、すぐ雪山に踏み込めってしまう危険さがある。計画したのだから何が何でも行つてしまおうという安易さが悲しい結末を招く。北アルプスの五竜岳に続く尾根で吹雪の中をピッケルなしでストックと雨具程度下山中のグループ

が目撃されていた。遭難したかは定かではないが高山の春山としてはきわめて危険きわまりない。もちろんベテラン登山者が予期せぬ遭難事故に卷込まれてしまうことも否定できないが、多くのケースではこれらの理由が複數絡み合つての遭難に至っている。下界はサクラが散つて新緑が目にはしみ初夏の爽やかな薫風が吹いているが、本州の5500から3000級の山々はこの季節は、まだ冬と春が同居しており、ひと荒れすれば冬に逆戻りしてしまう危さを秘めている。素晴らしい景色の白い山々から突然に緑の山へ飛はないように、中高年登山族の自戒を込めて十二分に肝に銘じたい。